

【2】東諸県郡小体連（学校数 5校 児童数 1259 名）

1 年間事業

日 程	事 業 内 容
令和5年5月23日	令和5年度第1回東諸県郡小学校体育連盟評議員会 (1) 自己紹介 (2) 県小体連第1回評議員会報告 (3) 東諸県郡小学校体育連盟事業計画 (4) 情報交換
令和5年6月22日	令和5年度第2回東諸県郡小学校体育連盟評議員会 (1) 県小体連第1回理事会・専門部会報告 (2) 令和5年度研究についての協議 (3) 令和5年度水泳記録会の計画
令和5年8月4日	第3回東諸県郡小学校体育連盟評議員会 (1) 令和5年度陸上記録会実施計画案の検討 (2) 令和6年度スポーツ交流会の計画
令和5年9月15日	令和5年度第4回東諸県郡小学校体育連盟評議員会 (1) 令和5年度水泳記録会の反省 (2) 令和5年度陸上記録会実施計画案の検討 (3) 令和5年度研究についての協議 (4) 令和6年度スポーツ交流会の計画
令和5年7月～9月中	第13回東諸県郡小学校水泳記録会 ＊内容は、事業部のあゆみを参照。
令和5年11月2日	令和5年度第5回東諸県郡小学校体育連盟評議員会 (1) 令和5年度研究授業についての検討 (2) 令和6年度スポーツ交流会の計画
令和5年11月28日	令和5年度 フラッグフットボール研修会 (1) 第6学年授業公開「フラッグフットボール」 (2) 質疑応答 (3) フラッグフットボール指導セミナー
令和5年10月・11月中	第13回東諸県郡小学校陸上記録会 ＊内容は、事業部のあゆみを参照。
令和6年2月中	令和5年度第6回東諸県郡小学校体育連盟評議員会 (1) 陸上記録会の反省 (2) 研究のまとめ (3) 次年度の計画

## 2 事業部のあゆみ

### 【第13回東諸県郡小学校水泳記録会】

- (1) 主 催  
東諸県郡小学校体育連盟
- (2) 日 時  
令和5年7月から9月の間
- (3) 会 場  
各校プール
- (4) 参加児童及び参加人数  
第5学年・第6学年 410人 〈役員20人〉
- (5) 種 目  
◎ タイムの部  
25m自由形 25m平泳ぎ 50m自由形 50m平泳ぎ  
100mリレー(4×25m)  
◎ 距離の部  
自由形 平泳ぎ

### 【第13回東諸県郡小学校陸上記録会】

- (1) 主 催  
東諸県郡小学校体育連盟
- (2) 日 時  
令和5年10月・11月中
- (3) 会 場  
各校グラウンド
- (4) 参加児童及び参加人数  
第6学年 216人 〈役員15人〉
- (6) 種 目  
選抜100m走 選抜200m走 選抜50mハードル走  
持久走(女子800m走 男子1000m走)  
選抜走り高跳び 選抜走り幅跳び 選抜ソフトボール投げ  
選抜400mリレー

## 令和5年度 東諸県郡小学校体育連盟研究内容

### 1 研究主題・副題

すべての児童が運動の楽しさや喜びを味わうことのできる体育科学習の在り方  
～主体的・対話的で深い学びの視点に立った授業実践を通して～

### 2 主題設定の理由

体育科学習の目標は、「生涯にわたって心身の健康を保持増進し豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力を育成する」ことである。そして、この目標を達成するためには、すべての児童が運動の楽しさや喜びを感じる必要があると考える。さらにいえば、その楽しさや喜びを児童に味わわせるために、指導する教員には、指導するための知識や技能等が必要となるであろう。平成29年度告示の学習指導要領では、中学年における陣取り型ボールゲーム(タグラグビー・フラッグフットボール)の指

導が必須となった。しかし、東諸県郡小学校体育連盟評議員の教諭 5 名のうち 2 名がこのフラッグフットボールの指導の経験がないということが話題に上がった。この現状から、東諸県郡内の小学校 5 校の体育を指導する教員の中には、フラッグフットボールの学習の指導の経験がない教員も多いのではないかと考えた。郡内のそのような教員の不安を少しでも解消しようと考え、本研究を行うことにした。

### 3 研究の内容

#### (1) 実態調査 (アンケート調査)

東諸県郡内の小学校 5 校の教員を対象にアンケート調査を行う。

- アンケートの実施
  - ・フラッグフットボールの指導経験の有無
  - ・教員の指導における不安の把握

#### (2) フラッグフットボールの指導の普及

- フラッグフットボール研修会の実施
  - ・授業公開
  - ・フラッグフットボール指導セミナーの開催

### 4 研究の実際

#### (1) 実態調査 (アンケート調査)

東諸県郡内の小学校 5 校の教員を対象にアンケート調査を行い、75 名からの回答があった。

- フラッグフットボールの指導経験の有無

指導経験の有無について調査した結果、以下の表のような結果となった。

指導経験なし	指導経験あり	今年度初めて実施(予定)
77% (58 名)	20% (15 名)	3% (2 名)

この結果からも、回答者の 4 分の 3 以上の教員は、指導した経験がないということが分かった。

- 指導における不安の把握

フラッグフットボールの学習の指導経験のある教員には、指導した際にどのようなことが難しかったかや困ったのかを調査し、指導経験のない教員には、今後指導の際に、どのようなことを知っておきたいかを調査した。調査結果は、右の図 (図 1) のようになった。

指導経験のない先生に着目すると「フラッグフットボールとはどのような競技なのか」や「フラッグフットボールのルールはどのようなものなのか」、「どのような活動があるのか」を知りたいという意見が多かった。

指導経験のある教員は、ルールの説明や活動内容について指導する際に困ったという回答だった。

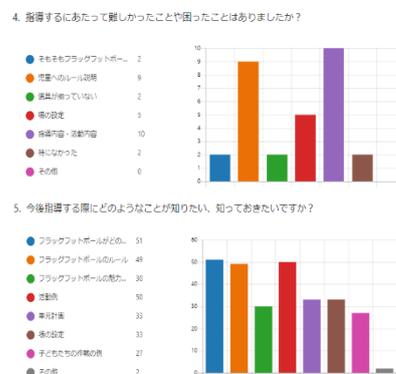


図 1 アンケート結果

#### (2) フラッグフットボールの指導の普及

(1) のアンケートで上記のような結果が出たため、フラッグフットボール研修会として、フラッグフットボールの授業を公開し、その後フラッグフットボールという競技の理解と活動の紹介を目的としたセミナーを開いた。

- 授業公開

令和 5 年 1 月 28 日 (火) に、国富町立森永小学校の第 6 学年 (授業者: 新原 翼教諭) で授業公開を行った。より多くの教員とともに、研修を深め、指導の充実を目指して各小学校



授業公開の様子

にも紹介し、特に3・4年生の担任については、1名以上参加していただくように呼びかけた。

当日は、郡小体連評議員5名に加えて、中学年の学級担任を中心に7名の教員にも参加していただいた。(3年担任3名・4年担任1名、2年担任1名、特別支援1名)

授業参観中は、指導経験のある小体連の先生から説明を受けながら、ルールを確認したり、子どもたちが作戦を考えている様子を熱心に観察したりしている姿が見られた。

授業後の質疑応答や事後アンケートでは、「ルールについては、子どもたちと相談しながら柔軟に取り組めることが分かった」や「特別支援学級の児童など運動が得意ではない児童でも、参加しやすい單元だと思った」など本教材について知ることができて良かったという肯定的な意見が多く聞かれた。また、参加者の先生からは授業内の子どもたちの動きから「低学年からの系統的な指導が、この競技の楽しさや面白さの活性化につながっていくのではないか」という話題が出た。小体連からも「1・2年生の鬼遊びや3・4年生での陣取り型ゲームやボール運び鬼など目の前の相手からどのようにして逃げるのかということが、高学年でフラッグフットボールを行う際の作戦の幅を広げたり、試合の活性化につながったりするのではないか。」という話しをし、系統的な指導の重要性を再確認することができた。

#### ○ フラッグフットボール指導セミナーの開催

フラッグフットボール指導セミナーでは、小体連の経験のある教員で講師をし、①～⑤の活動を中心としたセミナーを実施した。

- ① 本来のフラッグフットボールのルールと授業のベースとなるフラッグフットボール
- ② フラッグフットボールでキャッチボール(投げ方の確認)
- ③ フラッグフットボールのルールや動きの確認(ハンドオフ・フェイク)
- ④ 攻撃3対守備2のラン・パスありのゲーム(ハドル→攻撃→守備)
- ⑤ 活動例の紹介(ボール渡しリレー、ボール運び鬼(宝運び)・サインパスゲーム)

セミナーでは、②の活動で、ボールをまっすぐ投げる難しさに気づき、下投げやランの方が、得点につながりそうだと話が盛り上がった。また、ハドルで考えやってみた作戦の説明をしながら、ゲームを進めたり、ルールの確認を積極的に質問したりされる教員もいらっしやった。帰る前には、「是非今後授業をやってみたい」という話も聞かれた。



セミナーの様子

## 5 成果と課題

### (1) 成果

- フラッグフットボールという学習單元について、研修会に参加していただいた教員のフラッグフットボールの指導に対する不安を軽減することができた。
- 講習では、講義型ではなく実技を交えて体験をして、子どもたちが学習する動きや考えに触れることができた。

### (2) 課題

- 研修会資料は、各学校の体育主任に配付したが、研修会に参加できなかった教員への、周知が図れなかったので、各校での資料の配付や校内研修等で、さらなる周知を図っていきたい。
- フラッグフットボールの指導について概要を伝えることができたものの子どもの資質・能力を育成するための、効果的な活動や実践について研究し、伝えることができなかったため、次年度研究を深めていきたい。